
叶わない恋

和茶巢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

叶わない恋

【Nコード】

N6712Y

【作者名】

和茶巢

【あらすじ】

何をやるにもやる気がでなかったある男子。

中学に入り部活紹介の時にみた吹奏楽部に衝撃を受ける

その先生に恋した生徒の話。

そんな、BLな物語です。

大阪の学校なのでほぼ大阪弁になりますww

ブローグ

俺には好きな人がいる。

その恋は絶対になわなない。

自分ではわかつている。

だけど、何度も何度も諦めようとしても駄目だった。

なんで、俺はこの人に恋をしたんだろ？

あなたの目には俺はどんな風に映っていますか？

やっぱり、ただの生徒にしか見れないですよ？

もし、ちがう存在に映っているなら俺は死ぬほど嬉しいです。

どうすれば、好きになってくれますか？

頑張ってる子が好きって言ってましたね。

すごく頑張れば誉めてくれますか？

好きになってくれますか？

大好きです先生。

こんなに人を思うのは初めてです。

なので、俺を好きになって下さい。

お願いします。

それが、ぼくの願いです。

始まり（前書き）

長嶋 晃（ながしま あきら）

この物語の主人公

何をやるにもやる気がでなかった。

中学に入り部活紹介の時にみた吹奏楽部に衝撃を受け、入る事を決心する。

普段はテンションが高くてイタイところもあるが、皆に好かれている。

常にメガネをかけている。

始まり

俺は中学に入って何もやる気はなかった。

いつもの何もない日々。

正直言っただけだ。

次の時間は部活紹介らしい。

俺は体育館へと足を動かした。

俺は衝撃を受けた。

お世辞にも上手いとも言えないが、かつこいいと思った。
俺はこの部活に入ろうと決心した。

タッタッタ

「ようww お前はなんの部活にはいる？」

「俺は吹奏楽部に入ろうと思ってる」

「マジかよ！ 意外だな！！」

「そうか？ どっちにしろ俺は運動音痴だから、運動部は無理だしww」

「そうだよなww まあ、頑張れ！ 応援するからな！」

「サンキュー！ お前もがんばれよ！！」

そう俺は決めた。

この部活に入って今までの自分を変えろと。
それが、すべての始まりだと知らずに。

出会い

「ああもう!!」

俺は完全に迷っていた。

「なんで、こんなに広いんだ!」

吹奏楽部に見学に行きたいのに今俺はどこにいるんだ?
地図手元にねえし!
どうしよう?

「はあ、ついてねえな...。」

バンッ

「痛っ!!」

俺は悩んでいると、誰かにぶつかったらしい。

「ああ!! ごめん! 君大丈夫?」

優しい声だな。

「ああ、俺は大丈夫です。俺の方こそすみません。よそ見して歩いていたんで。」

「よかった。それじゃね。」

あつ、この人!!

「ちょっと待って下さい！もしかして、さっき吹奏楽部の演奏で指揮をした人にはですか？」

「ん？ああそうだよ。どうして？」

やった!!

「今俺、見学に行こうと思ってたんですけど、道に迷って…。」

「あつ、そうなんだ。ちょうど、俺も部室に行くからついておいで。」

あつ、優しい人だな…。
つか、この人身長ちっさいな。

「？どうかした？」

「あつ！何でも無いです！」

「そう？ついておいで。」

「はい！」

部室へ

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったね？ 名前なんていうんだい？」

「あつ、俺の名前は長嶋 晃っていいます！」

「長嶋かわかった。覚えておくよ。」

「よろしくお願いします！ ってあの、今さらなんですけど……。」
「どうした？」

「俺、先生の名前知らないんですけど……。」

「ああ、そういえば教えてなかったっけ。ごめんな。」

「いや、全然いいです！！ 謝らないでくださいっ！」

「はははっ 焦ってかわいいなww」

なっ／／／
この人！！

「からかわないでください！ それより名前を教えてください！！」

「ごめんごめんww 俺の名前は野川 新司 今、三年の理科を担当している、学年主任だ。」

学年主任って結構偉い人なんだな…。

「野川先生ですね！ 改めてよろしく願いします！！」

「ああ。 ってもうつくからな。」

「はい！」

普通に優しくてかつこいい人だな…。

「長嶋、驚くなよ。」

「へ？ 何ですか？」

そついつて、野川先生は音楽室のドアを開けた。

部室へ（後書き）

野川 新司 （のがわ しんじ）

三年の理科を担当している、学年主任の先生。

とても、生徒思いのとても優しい。

まだ、何か隠された事がいっぱいある謎の多い人物。

身長が男性なのに、164？しかなく、身長が低いと言われると落ち込む。

部室での出来事

「いらっしゃい新しい一年生ボーイ!」

「たくさん部活からこの部活を選んでくれた事に感謝するで!」

「君の瞳に乾杯」

「って、なんだよそれww」

そう言っって先輩たちは騒いでいた。

そして、俺は固まっていた…。

そして、後ろからだならぬよね殺気を感じた。

それを先輩が感じとったのか先輩たちはさっきまでのテンションじゃなくなつた。

「……………。なあ、皆俺は一年生の後ろからだならぬ殺気を感じんねんけど…………。」

「ああ。」

「…………。そこの一年生こっちにおいで」

「…………ふえ? あっはい。」ガッ

そう言つて、先輩は俺の腕をつかんだ。
そして、俺だけ音楽室に入れられた。
そして、先輩は大声で叫んだ

「今だ！！ 部室のドアを閉める！！！」

「アイアイサー！」

先輩たちはいそいでドアを閉めようとした……。
だが、

ガツ

「お前ら……？ いったい、何をしているんだ？」

先生は笑顔でいつも以上に優しくいつている。
それがいつも以上に怖かった…。

「皆、今やることはわかるよな？」

「「おう！」「」

「せーの」

「「すみませんでした！！！」」

俺は初めてこんなにきれいな土下座を見たかもしれない…。

「はあ、わかったから進藤こいつに部活の紹介をしてこい。」

「わかりました。」

俺は部室の端のほうに呼ばれてこの部活の説明を聞いた。

他にも一年生が来たらしいが、今は各パートの練習を見に行ってるらしい。

「初めまして、俺はこの部活の部長をしています。 進藤です。 楽器はクラリネット吹いてます。」

「おいおい、進藤君？ 下の名前も言ってるらん？」

「なっ！！ 悠斗余計な事をゆうな！」

「ほらほら」

「薰…。ボソッ」

「えっ？」

「もうちょっと大きな声で！」

「ああもう、わかったがな！ かおるや！！ 進藤 薰！ これで

いいんやろ!」

「かおるん良くできました!」

「うるさい!　　ってお前もついでに自己紹介しとけ。」

「うつすww　俺は岡村　悠斗　副部長と皆のテンション上げていく係をしていますww　担当楽器はチューバやで　よろしくな」

「悠斗そんな係はない。」

「わかつとるってww」

「まあ、よろしくな長嶋。」

「はい!」

楽しい先輩ばかりだなww
ちゃんと頑張ってみよう。

部室での出来事（後書き）

進藤 薫 しんとつ かおる

三年生

この部活の部長をしている。

楽器はクラリネットを吹いていて、とても優しい。
だが、怒ると怖い。

下の名前で呼ばれるのを嫌う。

悠斗とは仲が良く大抵は一緒にいる。

しかし、言い合いは毎日のようにしている。

よく、同期からは吹部のお母さんと呼ばれている。

岡村 悠斗 おかむら ゆうと

三年生

この部活の副部長をしている。

楽器はチューバを吹いている。

テンションが高く、緊張している人を見るとすぐにほぐしに行く。

普段は、こんな性格だか演奏が始まると、薫より怖くスイッチの切り替えがちゃんと出来る人。

優しく、一人一人ちゃんと見ている。

この部活で、薫と二人で夫婦と呼ばれている。

吹奏楽部の先輩

皆とても優しく、テンションが高く、団結力が高い。
なので、ふざける時も一緒だ。

パート紹介

「晃くんやつたけ？　今から、各パート紹介をするな」

そう言つて岡村先輩は席を立つた。

「まずは、俺のパートからいこう。」

そう言つて、進藤先輩も席をたつた。

「えゝ！　かおるんのところからなん！」

「かおるん言うな！　しゃあないやろ、俺のところからのほうが一番いいしお前のところからいってもあれやろww」

「なっ！？　まあ、お前が言うんやつたら俺はついて行くけどなww」

「ありがとうな。」

なんと言うか、仲が良いなww
つか、ラブラブ？

いや、それはねえかｗｗｗｗ

「まあ、とりあえずいこうや」

そう言つて先輩は笑顔で俺にいった。

「はい！」

ガラッ

「にしても、晃くんラッキーボーイやな」

「まあ、確かになｗｗ」

「え？　なんでですか？」

「普通にきたやつは俺ら部長、副部長に会ってないねん。」

「そうなんですか？」

「そう緊急部活会議があつて俺たち一年生に会ってないんねんｗｗ」

「だから君はラッキーボーイなんやねんなｗｗ」

そう言つて、二人は笑つていた。

俺はラッキーボーイなんか？

そう思いながら先輩の話を聞いていた。

「おっ着いたぞ！」

「ここが、俺が担当しているクラリネットパートやで。」

「おじゃします。」

「クラリネットは主にメロディーを担当している楽器や。そして、クラリネットより一回りぐらいデカイ楽器がバスクラリネット。クラリネットより低い音をだす楽器や。」

「つまり、バスクラリネットは低音楽器、クラリネットは高音楽器になるねん」

「へ」

「次はフルートパートに行こうか。」

「はい！」

そういつて、先輩は他に色々なパートを紹介してくれた。

「最後に、俺のパート行っちゃうで」

「はい！」

「悠斗のパートはチューバ。メロディーがなく、伴奏を主に担当している楽器やで。」

「つまり、縁の下の力持ちや、大黒柱、土台ってことやな！」

「へー、すごいんですね。」

「ありがとう」

「じゃあ、これで全部のパートを紹介したやんな？」

あれ？

あの楽器……。

まだ、紹介されてないよな？

「あの、すみません。あの楽器まだ紹介されてないです……。」

「ああ、あの楽器かいな。」

「んじゃ、紹介したるな。」

なんで、先輩たちはこの楽器を紹介しなかったんやろ？
ただ、忘れてただけやろうか？

最後の二つ

「あの楽器は、ユーフォニウムっていつてな、金管楽器の中低音を担当しとる楽器や。」

「紹介せえへんかったのは、吹いてる人が一人もおらんからやねん…。」

えっ、吹いてる人が一人もない！？
なんでだろう…。

「長嶋！ 長嶋！ どうしてん？」

「えっ？ あっ、すみません！ あの、吹いてる人が一人もないってどういう事ですか？」

「あんな…、ユーフォの子やめてしもってん…。」

「ついていかれへんくなってるん…。」

「そうなんですか…。」

「でも、心配することはないで！」

「えっ？ なんでですか？」

「野川先生おるやる？」

「あの人は実はユーフォやっとなねんww」

えっ、野川先生が！？

「それ、マジですか？」

「マジマジおおマジwwww」

「綺麗な音して、かつこいいねんで！」

野川先生も楽器吹くねんや…

「それは、聞いてみたいですね！」

「でも、俺たちでもあんまり聞いたことないねん…。」

「そうそう、先生なかなか吹いてくれへんねん…。 けちやるww」

なかなか吹いてくれへんねんや…。

でも、先生の吹いてる姿見てみたいな！

「まあ、運が良かった晃くんやつたら見れるかもなww」

「見れたら嬉しいですけどねww」

「まあ、頑張りやww」

「そろそろやな、長嶋これで案内終わるけど、質問ある？」

「…あの、初めてなんですけどちゃんと出来ますかね？」

「当たり前！ 皆初めて楽器持った子がたくさんおるでww でも、半年もすればうまくなるわ！」

「初めてでも、安心だから入ってくれよな！」

「はい！」

決めた、やっぱりこの部活で行こう。
そして、今までの自分を変えてみせるねん！！

音色

「あゝ！」

本日二回目の学校…。

下校時間とつくに過ぎての学校…。

原因は俺が学校に忘れ物をしたから…。

明日取りに行けばいい？

確かにw w

でも、あれはバレたら没収されるからw w

「にしても、何処に落としたんやろ？　ここまで探して無かったら

…。音楽室やんな？」

俺は足を音楽室に向け歩きだした。

「だれにも、アレが見つかってませんように！」

つか、俺先生に見つかったらヤバイよなw w

てか、音楽室あいてんのかな？

まっ、行ってから今後どうするか決めよ。

♪ ♪ ♪

「ん？ この音なんや？ 何処から聞こえてくんねん？」

俺は音を頼りに歩いていった。

そしたら、音楽室にっていた。

「げっ！？ 誰かおるやん！ あかりもバツチシついとるし、音も…。 いったい、こんな時間に誰やねん！」

俺は恐る恐るドアを少し開けて部屋の中を覗いてみた。
そしたら、そこにいたのは野川先生だった…

「なっ！？ 野川先生！ こんな時間に練習？」

先生は見たことないほど真剣で、同じ所でも出来るまで、何十回も繰り返していた。

「はあ、できねえな…。 つか、コンタクトはきつい！ 眼鏡持つてくればよかったな…。」

そう言って先生は真剣な顔に戻り、またユーフォを吹いていた。

俺は目が離せなかった。

って、こんな事をしている場合じゃない!!

はやく、アレを取りに行かないと!!

でも、どうやって…。

「あゝ!! もう!」

俺が叫んだその時だった…。

「うつさい! 今何時やと思うねん!! 下校時間とつぐに過ぎてるねんぞ!!」

「あつ、先生…。」

「長嶋かいな、何しとんねん!」

「ちやうねん! 忘れ物をして取りに來ただけやねん!!」

「はあ!? …… しゃたないな。 はよなかはいって取ってこい!」

「ありがとうございます!」

チャンス! はやく探し出して没収だけは避けなあかん!!

「無い！ 無い！ 何処にもない…。」

「なあ、長嶋は何を探してるんや？」

「えっ！？ なんでもいいやないですか〜ww」

「なあ、これじゃ無いよな？」

そう言って先生はポケットの中からネックレスを取り出した。

「っ！！ それだぁー！！！！」

俺は思わず叫んでしまった…。

その後の先生の顔はいうまでもなく怖かった…。

でも、先生からアレを取り返さな！！

ハプニング？

ヤバイヤバイ！

この学校はアクセサリーは禁止で見つけしだい没収なんだよな…。
でも、アレだけは！

「先生！！ それだけは、返してください！」

そう言つて、俺は土下座をした。

他人からみたらどれだけ無様だった事だか…。

「先生！ 一生のお願いです！！ それだけはどうか没収しないで
ください！！」

「おい、顔あげろ」

「先生！？」

俺は目を輝かせて先生を見た。

「そんな目をキラキラさせんな！ けど、お前もわかってるだろ？
アクセサリーが見つつけしだい没収だって事は…。」

「それだけは、返してください！　お願いします！」

「……。　はあ。　しゃあないな……。　ほら、そんなに大切な物だったらもう学校に持ってくんなよ！」

「先生ありがとう！　神やわ！」

ガッ

「ふえ！？」

俺は手を伸ばしたその瞬間床に滑って転けそうになった！

ヤバい！

転ける！！

バッ

ガタンッ

痛…くない？

それも、何か暖かいし柔らかい……。　もしかして！！

目を開けたら人の上に乗ってる事がわかった。

やっぱり、先生にかばってもらって…。

「先生！ 大丈夫ですか！？」

「大丈夫大丈夫ww それより、お前の方は大丈夫か？」

「大丈夫です…。 本当にすみませんでした！」

「大丈夫だってww」

そう言って先生は俺の頭を撫でてきた。
そして、笑顔で

「お前が無事ならよかった…。 だから泣くなや…。」

先生に言われて初めてきずいた。
俺は泣いていた。

「そんなごといっただって…。 先生を下敷きにしないで俺…。」

「大丈夫だってww ほらピンピンしてるだろ？」

そう言つて先生は立ち上がつて腕や足などを回していた。

「なっ？ 大丈夫だろ？ それにしても、長嶋はいいやつだな！」

「ふえ？ なんですか？」

「だって俺のために泣いてくれたんだろ？ いいやつじゃないか！」

先生は笑顔でまた頭を撫でてきた…。

「あっありがとうございます。それに、先生が無事ならよかったです！」

「そうかww って、時間がヤバいな…。」

「ほんとだ…。」

「送っていつてやろうか？」

「大丈夫です！ それより、ネックレスありがとうございました！」

「明日からは持ってくるなよ！」

「はい！それじゃさようなら！」

はあ、あつてよかった！
にしても、顔が熱いし、動機も早い…。
俺風邪でもひいたかな？

その時俺はまだ知らなかった。
それが、恋になるなんて…。

登校中

ふあ

眠い…。

つか、学校まで遠いんだよな…。

「おい！ 長嶋くんおはようww」

そう言つて進藤先輩が歩いてきた。

「あつ、おはようございます！ 先輩もこっち方面なんですか？」

「そうやでww あっちの角を曲がった所にマンションあるやろ？
あそこが俺の家やねんww」

「そうなんですか！ 俺の家その近くです！」

「ほんまかww んじゃ、朝時々会つやろうなww」

「はい！ ……。先輩質問していいですか？」

「どうしたん？」

「岡村先輩と一緒にじゃないんですか？」

「ああ、あいつは今から迎えに行くねん…。」

「そうなんですか？」

「ああ、んで毎回遅刻ギリギリになんねんな…。」

「え…？」

「あいつ、俺が来たら起き出して用意し始めんねん…。」

「ははは…。それはお疲れ様です…。」

「ありがとうww んじゃ、俺は迎えに行くからバイバイ」

「さよなら」

すごいな…。

つか、迎えにまでいくんや…。

進藤先輩お母さんみたいやな…。

キンコーンカーンコーン
キンコーンカーンコーン

うし、今日の授業は終わった！
吹奏楽部の見学にでも行こうかな！

……。

また、このパターンかよ！
つか、この学校広すぎるんねん！
ほんま無いわ〜！

「ん？ 長嶋じゃないか！ どうしたんだ？」

「先生〜！ 聞いてくださいよ！」

「そうかww また道に迷ったのかww」

「だって、この学校広すぎるんですもん！」

「はははっww 今度お前が道に迷ったらお前の背中に音楽室までの道を教えてくださいとでも書いておこうかww」

「やめてくださいよ！ そんなことかいたら一生の恥ですよ！」

「はははっww 冗談だってww あっそうだ、今日は昨日のアレ持ってきてないよな？」

「あたりまえです！ あれは没収されたくないですから…。」

「そうか…。 そうですね、長嶋はなんの楽器になりたいんだ？」

「俺はユーフォが吹きたいです！」

「え？ ユーフォが吹きたい！？」

「はい！ 昨日先生が吹いているのを見て俺もあんな風に吹きたいって思っただけです！」

「なんか照れるなww」

「あっ、昨日の思い出したんですが、本当に大丈夫でしたか？」

「大丈夫だって！ 俺は頑丈だから！！」

「それなら良かったです！」

「あつ、今日は全体で合奏するからちゃんと聞いておけよ！」

「わかりました！」

「あとで感想きくからなww」

「マジですかww」

「おうマジww」

「だからちゃんと聞いておけよ！」

「はい！」

「今日も先生と話せて楽しいな！
って、なんでこんな気分になるんだろ…？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6712y/>

叶わない恋

2011年12月16日21時52分発行